

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 62 号

2007 年 10 月



幕川周辺ブナ観察会

8月26日(日)に幕川周辺のブナ観察会を実施しました。参加者は17名でした。このコースでの観察会は6年ぶり2回目です。くしくも前回と同日の開催となりました。

幕滝観察コース入り口には横断幕が張られるなど6年前と比べて人のにぎわいが感じられます。しかし幕滝観察道から登山道に入ると一転して静かな原生的自然林となり別世界です。ここでは、ブナ、コメツガ、オオシラビソ、ミズナラ、サワラの老壮木が混生しており、吾妻連峰でも極めて珍しい樹相を呈しています。一時、幽玄な森の佇まいを味わい登山開始。登山道は、刈り払いが行われたばかりでした。その幅は3mに達しており、車が通れるほど広々としていました。過剰な刈り払いと思われる。ミズナラとブナの混交林の林相は地形を反映して変化し、風の当たらない凹地ではブナの壮木の群落がよく発達し、風当たりの強いところではサラサドウダン等のマント植生が発達した矮性林となります。やがて原生林的な雰囲気が漂うブナとコメツガの混交林となり、林床では珍しいコイチョウランの花なども観察できました。オオシラビソ林の入り口で終点とし昼食後、下山しました。帰りは雄大な幕滝と周辺のフキユキノシタ群集と呼ばれる独特の植生を鑑賞して散会となりました。



フキユキノシタ

「幕川周辺のブナ観察会」に参加して

轡田克史

職場の同僚・山内さんにお誘いいただき、平成19年8月26日に開催された「幕川周辺のブナ観察会」に参加しました。当日は好天に恵まれ、総勢17名で山歩きを楽しみました。

コースは幕川温泉から麦平湿原手前まで。9時過ぎに歩きはじめ、12時に折り返し地点。幕川温泉に戻ったのが14時30分でした。ブナ林からオオシラビソ林へと推移する森の中を、往復5時間くらいかけてゆっくり歩いたことになります。途中、佐藤さんの説明がわかりやすかったです。

ソバナ、コイチョウラン、ツルシキミ、ツルリンドウ、サラシナショウマ、アキノキリンソウ、ミヤマセンキョウの花が咲き、タケシマラン、オオカメノキ、トチバナジン、マイヅルソウが実を付けていました。これらの名前はすべて教えていただいたもの。自分でも花の名前がわかるといいなと思いました。

帰りに幕滝でマイナスイオン浴。滝に打たれる修行者ほどではありませんが、すっかりリフレッシュしました。

登山道はきれいに整備され、「過度の伐採だ」と評されていました。また、登山道が荒廃するプロセス（人が通る→裸地化→流水→不快！→人が脇を通る→繰り返す）の説明もありました。これからは、せめて登山道の周縁を踏まないように心がけます。

高山の原生林を守る会のイベントに参加するのは今回が初めてでした。会の皆さんのおかげで、中身の濃い山歩きをすることができました。また参加したいと思います。ありがとうございました。



幅3mに達する刈り払い



ブナとコメツガの混交林



カメバヒキオコシ



種を飛ばした後のイワアカバナの莢

東大巔湿原植生回復ボランティア作業参加報告 高橋淳一

吾妻連峰西部の主稜線部は広範囲に湿原が存在し、多くの貴重な高山植物が見られるが、観光道路やゴンドラ等のアクセスが発達していることから、登山者の大量入山による踏付けによって植物の枯死、裸地化、土壌侵食等々深刻な状況となっていた。巻機山（新潟県）で長年植生回復に取り組んで居られる専門家からも、国内で最も荒廃が進行している山域の一つではないかとの厳しい評価がされた。このような状況に対し、環境庁（現在：環境省）福島県、山形県によって1998年度より保全事業が実施され、木道設置や植生マット敷設などの取り組みがなされてきた。しかし、西大巔周辺地域等では未整備であるとともに、植生復元については弥兵衛平地区など一部地域を除き、手付かずの状況となっていることから、福島県においては平成2002年に本地区の保全作業を策定、

当会も県よりの要請を受け2003年9月、6名がボランティア作業に参加した。そして、今年6月3日、3年余が経過したことによる植生ネット等の劣化が顕著になってきたことから、再度の要請を受け、作業に参加協力したので以下に報告する。

当日は悪天候も予想されたが、入山口の立岩に着けば、意外や晴天。一人当たり8kg前後の器材を6名が背負い登山道に入る。針葉樹林帯に至り、1時間程で残雪が現れ、やがて登山道は見えなくなったことから、帰路を考慮し、赤布の目印を付けながら進む。歩行開始から2時間余で湿原に到達後、明月荘を經由し、正午前に現地に着く。まもなく県の担当者3名と同じくボランティアの「吾妻山の会」3名が合流、短時間で昼食を済ませ、事前説明後、12名で作業に入る。当会は前回実施した最もデリケートな池塘崩壊部と植生ネットの未設置箇所を担当、1時間程で終了となった。幸いにも池塘は崩壊が食い止められ、裸地化した湿原では数本ではあるものの植物の発生が見られるなど作業の効果を確認、意義を実感することができた。そして継続の必要性も痛感した。作業後は現地解散となり、天元台に戻る県の担当者等と分かれ、明月荘経由で往路を辿り、途中の木道では残雪抱いた雄大な景観や澄んだ空気を堪能しながら4時には入山口に戻り、参加者全員が大満足で家路についた。



東大巔と弥平衛平



決壊寸前の池塘はまだ無事であった



4年前に張られたネットの痕跡



僅かであるが植生回復の兆し



今回はネットを二枚重ねで敷いた



池塘の部分は今回も当会が担当した

マルバルコウ 鎌田 和子

昨年、秋も深まった頃にサイクリングロードで見つけたつる性の植物。朱色の可愛い花だ。調べたら、熱帯アメリカ原産の帰化植物らしい。タネは朝顔に似ている。どちらかという、マメアサガオと同じように見える。庭の月桂樹の下に採取したタネを蒔いておいた。

春になり、スマイレに夢中になったけれど、マルバルコウを忘れはしなかった。秋に楽しめるといいな、でも、うまく発芽するかなという期待と不安を誰にも語れず過ごしてきた。ある日、注意深くマルバルコウの発芽はまだかと月桂樹の根元を見たら、V字形の赤みを帯びた芽が出ている。これはマルバルコウの芽だ！と大喜び。すぐに踏まれないように、間違っって他の草と一緒に引き抜かないようにと、囲いをする。大事に大事にしてきた。そのうち、つるが出てきたので手をくれてやる。うまく絡みつかないと手を交換するなど、私にしては異例の世話焼きを繰り返した。そうこうしているうちに、その植物のそばに似たような葉が出ていることに気がついた。あれっ、今ごろ何かな？マメアサガオかなと思ったりしたが、さほど世話を焼かず放っておいた。しばらくしてつるが伸びてきたので短い手をくれただけ。いとも粗末な扱い方だ。



ところで、サイクリングロードのほうにはマルバルコウらしい葉はでていない。他の草に負けたのか、発芽しなかったのか、わからない。昨年マルバルコウに出会ったのは偶然だった。まさに一期一会。あれ以来、帰化植物に対する私の考え方は変わった。今年、庭でマルバルコウを咲かせることができたなら、あのマルバルコウの歴史は続くことになる。どこからどこをやってきたタネなのか、どんな歴史を持っているマルバルコウなのか、ロマンを感じる。そんな花をぜひ咲かせたいとひとり胸を躍らせて待った。9月に入ってからというものは、マルバルコウはまだかまだかと、毎日つぼみを見つめるようになった。その緊張感がふっと途切れたある日、何気なく目を向けると、なんと白い花が咲いているではないか。あれ～！マルバルコウじゃなかったんだ。マメアサガオか～。せっかく咲いた清楚なマメア

サガオには悪かったが、一瞬がっかりした。待てよ。ひょっとすると後れて出てきたのがマルバルコウかも。どうやって見分ける？...両者の違いは必ずあるはずだ。花の違いだけではない、何かあるはずと葉を比べてみた。よく観察したら、葉の形が違うことに気がついた。葉の基部の心形のところにわずかだが明らかな違いがあった。

粗末な扱いを受けていた方が、実はマルバルコウなのかもしれない。朱色の花が咲くのを待つしかない。気分が少し明るくなった。マメアサガオは初日に2つ咲き、翌朝は5つ、その次の日は50個も咲いた。マメアサガオが咲き出してから6日目頃に、マルバルコウのつぼみがうっすらと赤く色づいていることに気づいた。やっぱりこっちがマルバルコウだったのだ。まもなくかわいい花を開くだろうマルバルコウに、ごめん、ごめん。よく出てきてくれたね。マルバルコウの旅はまだまだ続けられるねと、心の中で声をかけていた。



鹿狼山の夏～キツネノカミソリ～

小幡 仁子

今年もお盆の13日の暑い日に、キツネノカミソリを見に鹿狼山に登った。登山口から右手に折れて少し上がると、右手にコナラやクヌギの明るいなだらかな斜面が広がる。キツネノカミソリはそこに群落を作っている。花に対しての名前がいささか良くないと思うのだが、どの本にも葉が剃刀に似ているからとある。また、狐というのはこの花の独特な色合いが狐の毛衣のようだからか、あるいは薄暗い中でオレンジ色に咲くこの花のイメージが狐の怪しさと重なったものか。しかし、名前はどうか、鹿狼山のキツネノカミソリはオレンジ色がそう強くなく、ややピンク色がかって優しい感じである。(ああ、今年も無事に花開き、いい時期に見に来たなあ)と一人悦に入り、写真を撮る。鹿狼山ではオオバジャ

ノヒゲの後にこのキツネノカミソリが現れる。7月の下旬にきた時はこのあたりで甘い香りがした。この香りは何だろうと思ひ、たくさん咲いているのはオオバジャノヒゲの白い小さな花しかなかったので、半信半疑で花を取って嗅いでみたら同じ甘い香りがした。新しい発見だった。8月になると、オオバジャノヒゲは跡形もなくなり、キツネノカミソリで斜面は占められる。植物が適地を選び、時期を逃さずに花開くという自然の営みに改めて感動したのだった。

さて、昨年のことになるが、お盆に姪が丁度帰ってきていたので、鹿狼山にキツネノカミソリがきれいに咲いているからと誘い、姉も一緒に三人で登った。姪は東京で小学校の教師をして3年になった。登り始めて間もなく、ちょっと具合が悪いという。見れば少し顔色が青いようだった。石段で腰をおろしてゆっくりした。そんなことでは子供達を連れて遠足に行ったりするのは勤まるまいよ。というと、大丈夫。仕事となれば気合いが入り、しゃきっとするから、こんなことにはならないよとの返事。ふるさとに帰り安心して、気が抜けたのだろう。キツネノカミソリの群落の前で「鹿狼山にこんなきれいな所があったんだ。子供達にも見せる！」とあって喜んでいて。30人ほどいるというクラスの子供達に、ふるさと鹿狼山のキツネノカミソリの写真を見せて、どう言ったのだろうか。

そんなことを思い出しながら再び花に目を向けると、陽光に透けて、キツネノカミソリのオレンジ色は美しい。群落は炎のようでもある。私はいつの間にか自分の中のオレンジ色の記憶をたどっていた。昔は毎日薪を燃やした。焚き火や炭火、石炭ストーブ。めらめらと動く炎は不思議と見飽きないものだった。そして、火を真ん中に家族や友達が集まった。記憶の中でオレンジ色は暖かで、しかも変化に富んでいた。そうして、行き着いたのは父の肩車で見た夕焼けのオレンジ色だった。何歳の頃だったのだろうか。肩車をされていたのだから、余程幼いはずだと思う。夕方、おそらく野良仕事の帰りだったのだろう。父は私を肩車して夕日に向かって歩いていた。私はオレンジ色に沈む夕日を父の肩に乗りながら眺めていた。40数年も前の記憶である。

花や、花の色とともに心温まる思い出があることをありがたいことだと思っている。今の生活は季節感が薄れ、冬でもエアコンやパネルヒーターなどで快適かつクリーンな暮らしである。火を焚くなどということは滅多にないし、赤々と燃える火をみんなで囲むこともない。便利にはなったが、何か寂しい。これでよいものかと思う。かといって、今の生活を変えることは難しいことだ。

私は、月に何度か鹿狼山に登り、折々に咲く美しい花を見ながら、様々に物を思ったり、写真を撮ったりしている。それにしても、登る度に新しい発見がある。それは、季節が移り変わるのも当然のことではあるが、植物の世界が奥深いということでもあろう。キツネノカミソリ一つをとってみても、ヒガンバナ科のこの花は、春には葉っぱのみが出て、夏にはその葉が枯れてしまい、花だけが咲くのである。以前はそんなことも知らずにいた。だから、オオバジャノヒゲの葉っぱをキツネノカミソリの葉っぱと誤っていたのである。

たった430mの阿武隈の小さい山だけど、鹿狼山は私にとってはお宝の山になってきた。もしかするとこの山には一生かかっても分からないものがあるかもしれない。当分は鹿狼山通いが続きそうである。



鹿狼山のキツネノカミソリは
明るい雑木林の中に咲く。



キツネノカミソリの群落は、
懐かしい記憶を蘇らせてくれ
た。

東北ブナ紀行（27）

奥田 博

前号で50山のブナ紹介となるが、まだ青森・秋田・岩手県の北東北が終っていないと申し上げた。いよいよ東北南部へと移りたいが、まだ北東北に未練があるようです。今回も岩手県のブナ林を紹介します。

51) 未来の森・湯川沼（岩手県）

未来の森とは誰が名づけたのだろうか。1996年の春にカタクリの会の案内で訪れている。二度目は冬に訪れたが、この冬のブナが印象的だった。カタクリの会のパンフレットに「時代（とき）が来て、未来の森に、ブナ繁る」とある。なかなかいい言葉だが、これは今は若いブナ林だが、このまま育てば未来は立派な森に育つという願いが込められている。この取り付きまでは長い林道歩きが必要だ。その林道の周辺は見事に、皆伐されて痛々しい。

林道を離れ登山道に入ると若いブナが多く見られるようになる。沢に沿って高度を上げていくが、サワグルミやトチノキ、カツラなど多様だ。ブナが散見されるようになるとミズナラ、イタヤカエデ、オオカメノキ、ハウチワカエデ、オオバクロモジなどが見られた。そして湯川沼に着けば、沼の奥には太いブナがいくつか見られた。このブナが枯れて倒れるまでに、周囲のブナは育つだろう。今後、伐採されなければ、、、

コースタイム：湯川温泉（1時間30分）登山口（45分）湯川沼（30分）登山口（1時間30分）野々宿



雪に覆われたブナの木

52) 焼石連峰・天竺山麓（岩手県）

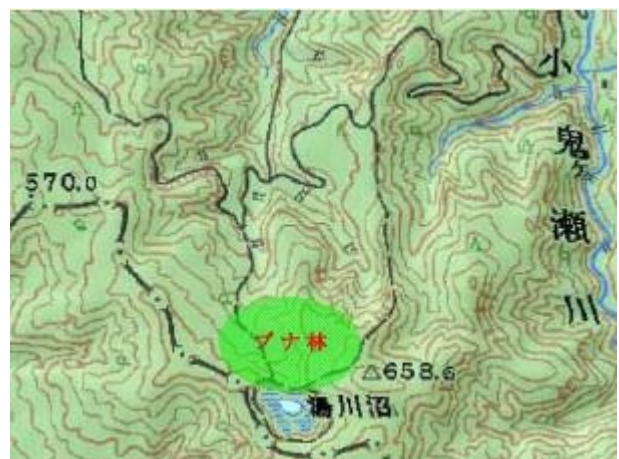
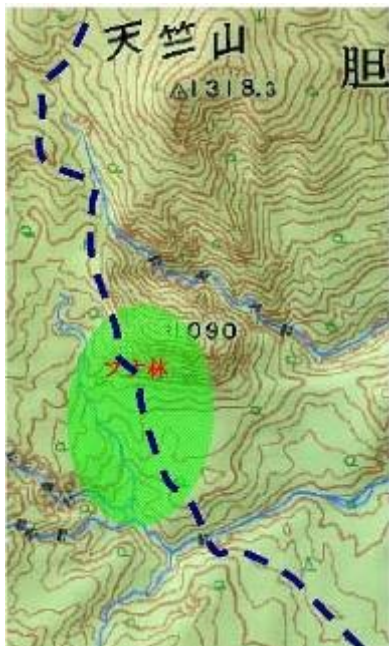
焼石連峰にはブナ林が多く残っているが、その中ではマイナーな場所を紹介したい。このブナ林を訪れるには、尿前川の渡渉をしなければならない。しかも地図には登山道が記載されていないし、もちろんガイドブックにも紹介されていない。しかし登山道はしっかりと付けられているので、心配はない。中沼登山口に車を置いて、ここから古い林道をたどる。1時間弱で尿前沢の渡渉となる。赤いペンキが目印だが、増水している場合には渡れない位に水量は多い。

この沢を渡れば、急坂が始まるが、またブナ林の始まりである。広い斜面にブナが広がるが、次第に尾根は狭くなる。狭い尾根になるとブナは、尾根の両側に広がる。ブナ林は1090mピークを回り込む尾根まで続く。どこまで登るかは本人の体力次第。この道をたどれば、天竺沢を越えて金明水避難小屋まで続き、焼石連峰縦走路まで登ることが可能だ。

コースタイム：中沼登山道（1時間）尿前沢（1時間）ブナ林



スッキリとしたブナ



吾妻・安達太良花紀行 32

佐藤 守

シラネセンキュウ (*Angelica polymorpha* セリ科シシウド属)

山麓の林縁や溪流沿いなど、日陰の湿り気のある林内に植生する多年草。植生域の標高は低く、里山の花である。

葉は互生で3～4回3出羽状複葉。小葉には深い切れ込みがあり、さらに不ぞろいの鋸歯を持つ重鋸歯である。枝分かれを3～4回繰り返して、先端は3出葉状(1枚の葉が3つの小葉に分かれた複葉)の小葉をつける。上部の葉は葉柄が発達し、ふくらんで茎を包む。茎は中空で表皮は緑色または紫黒色を帯び、各節で内側に折れる。

花は複散形花序で大散形花序は15-30個の小散形花序からなり、1つの小散形花序は40-50個の白い小花からなる。小花は5数性で5花弁と5本の雄しべで構成される。花弁は中央部が窪み、さらに花弁の大きさは不ぞろいである。果実は翼状に2稜を備えるのが特徴である。開花期は9月から10月でセリ科の花ではオオバセンキュウと並んで最も遅い。

吾妻・高山に植生するセンキュウ類にはミヤマセンキュウ、シラネセンキュウ、オオバセンキュウがあり、一見していずれも似ているため識別に苦労する。ミヤマセンキュウは開花期が早く7月から8月である。しかしシラネセンキュウ、オオバセンキュウは開花期も同時期で茎が屈曲する特性も同じである。オオバセンキュウはシラネセンキュウより植生する標高が明らかに高く、小葉の鋸歯は規則的な単鋸歯である。なお、ミヤマセンキュウはオオバセンキュウと植生域がほぼ重なる。

秋も深まった頃、ケヤキ林でこの花に遭遇した。限りなく本種に近いと思ったが、吾妻連峰の植生に関する手持ちの資料には記載がなく自信が持てなかった。翌年に果実を採取して持ち帰り図鑑で確認し、別の山域で葉の形態が違うオオバセンキュウを見つけてようやく間違いのないことを確信した。



ダキバヒメアザミ (*Cirsium amplexifolium* キク科アザミ属)

山地に生える多年草。木漏れ日の差し込む林床では草丈50cmに満たない個体が点在する程度であるが湿地周辺では草丈が1mを超える大型の個体が群落を形成する。

日本に植生するアザミ類のほとんどは日本固有種であり、スミレ類同様、日本人に古くから親しまれてきた。アザミの仲間は種類が多く、変異も多いので分類が困難な植物である。開花時の根生葉の有無、葉の切れ込みの深さ、葉の基部が茎を抱くか、花(頭花)は上向きか下向き(これを點頭と言う)～横向きか、総苞(花序全体を包む葉の変形したもの)が反り返るか否か、総苞片の列(周方向)の数、総苞は粘るかどうかが識別の基準となる。

ダキバヒメアザミは、開花時は根生葉が無く、葉の先は尖り、縁は鋸歯がある。葉が羽状に切れ込む株もある。中部以下の葉の基部が茎を抱くのが最大の特徴で、これが種名(抱茎葉を有するの意)となっている。花は淡い紅紫色の多数の筒状花で構成され、上向きに咲く。花冠の先端は5裂し、不規則に折り重なり柔らかな毛毬状の花の塊を形成する。その塊の中から合着した5つの雄しべに包まれた雌しべが突き出て繊細なシルエットを強調している。総苞片は粘らない。茎は無毛で、個体により紅紫色を帯びる。形態的にはナンブアザミに酷似するがナンブアザミは花が下向きに咲き、葉は茎を抱かないので区別できる。

2000年の晩秋に高山の南山麓を散策した際に、草丈の小さなアザミに遭遇し、写真に収めた。葉はナンブアザミに似ていたが、花の着き方が異なり不明のままであった。最近、茎を抱いた本種に出合いようやくその名前が判明した。アザミ類は山菜としても昔から重宝されており、ナンブアザミ、サワアザミと並んで本種も代表的な山菜アザミであるが、ナンブアザミと比較して、吾妻・高山での植生域は限られているように思われる。なお、アザミの語源は一説には、その美しい花を手折ろうとして葉の棘に触れ、あざむ(驚きあわてる)ことに由来すると言う。



第 93 回自然観察会案内：的場川周辺の紅葉観察会

日時：10月21日（日）8：00～15：30

集合場所 四季の里交差点正面入口駐車場 集合時間 8：00 参加定員 20名

内容 土湯登山口からの的場川まで散策し、ミズナラ林やブナ林の紅葉を楽しみます。途中の振り沢では以前残雪期に確認した大ブナを観察します。的場川では恒例の芋煮会です。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円）

申し込み：10月20日（土）まで

参加申込先：高橋淳一（TEL 024-593-1990）または佐藤守（TEL 024-593-0188）

電話またはメールにて申し込みください。（電話申込は夜間7時～9時でお願いします）

第 94 回自然観察会案内：高山南山麓のブナ観察と総会

日時：11月25日（日）8：30～16：00

集合場所：四季の里交差点正面入口駐車場

集合時間：8：30 参加定員：30名（但し、総会は無制限）

内容：午前中は高山南山麓の巨大ブナ（確認している範囲では高山最大のブナ）を観察し、午後はサンスカイ土湯で汗を流した後、総会です。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

総会会場：サンスカイ土湯会議室

参加費用： 保険代（300円）

申し込み：11月24日（土）まで

高山の原生林を守る会創立 20 周年記念自然展開催の案内

「高山の原生林を守る会」は、1987年、吾妻連峰の一峰である高山にスキー場開発の計画が具体化したとき、高山の自然を大きく損ねるスキー場開発に疑問を持つ福島市民が集まって結成されました。高山（たかやま）は吾妻連峰の東南端に位置し、標高1804mの森深い山です。今回の自然展では土湯から高山山頂までに観察できる植物200点余りを写真で紹介するほか草木染、木の実を利用した創作、自然を描いた絵画や版画を展示します。

日時：11月14日（木）～19日（月）（14日と19日は準備と後片付けです）

会場：福島市民ギャラリー（福島市置賜町4-20 TEL：024-524-2256、2330）

お願い：作品を出品していただける方を募集しています。10月末日頃までに申し込みください

ボランティア募集：会場準備と後片付け、開催期間中の受付のお手伝いをしていただける方を求めています。協力していただける方は連絡をください。

第 28 回「東北自然保護の集い」岩手県大会（テーマ：東北の森と海を考える）案内

期日：2007年11月10日（土）～12日（日） 会場：大沢温泉自炊部（花巻市）

参加費：(A) 9000円（資料代+宿泊費+懇親会費）(B) 2000円（資料代+懇親会費）(C) 1000円（資料代）

参加連絡先：望月達也（TEL&FAX 0198-27-5985 E-mail windy_beech_forest@yahoo.co.jp）

参加を希望する方は高橋淳一又は佐藤守へ連絡ください。

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

【編集後記】 ■会報61号で話題になった「信夫山の展望台整備」に伴う森林伐採の件、新聞報道によると10月には福島市の風致保安林解除申請が県から許可される見通しと言う。市民有志の伐採見合わせの申し入れに対する許可は下りないので断念したとの市当局の説明はうそだったのか。 ■解除要件の厳しい風致保安林の伐採を許可する県側の根拠を知りたいと思う。景観を整備するという発想は自然保護より開発する側にスタンスをおいた理念で市の自然保護行政の底の浅さを感じる。（MS記）。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第62号 2007年10月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木